

第49回

# ごはん お米と わたし

作文・図画  
岩手県コンクール作品集



JA岩手県中央会

## 目次

ごあいさつ	1
JA岩手県中央会 代表理事会長 伊藤 清孝	
図画部門入賞作品	2
作文部門入賞作品	9
総評	16
審査委員長／元岩手大学教職大学院 特命教授 小岩 和彦	
図画部門を審査して	16
元中学校指導教諭 佐々木 俊江	
作文部門を審査して	17
盛岡市教育委員会 学校教育課 主任指導主事 柴田 良輔	
コンクール入賞一覧	18
コンクール概要	22

### 図画・作文各部門

- 1部：小学校1～3年
- 2部：小学校4～6年
- 3部：中学校1～3年



ごあいさつ

JA岩手県中央会

代表理事会長

伊藤 清孝

第49回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、県内各地から作文60点、図画125点もの力作が寄せられました。ご応募いただきました小・中学生の皆さん、とても素晴らしい作品をありがとうございました。

そして、たくさんのお応募作品の中から見事に入賞された皆さん、本当におめでとうございます。

また、全国コンクールにおいても、作文部門1点、図画部門2点が優秀賞に選ばれました。心からお祝いを申し上げます。

このコンクールは、次世代を担う小・中学生の皆さんに、日本の豊かな食卓と国土を作りあげてきたごはん・お米、そして稲作をはじめとする農業についての学びを深めてもらうため、JAグループが昭和51年から実施している取組みです。

これをきっかけに小・中学生の皆さんが、家族で食卓を囲むことの幸せを感じたり、お米を作る農家の思いを知り、自分たちが暮らす地域農業について考えたことは、とても貴重な経験となったのではないのでしょうか。

皆さんから寄せられた作品を拝見いたしますと、米作り・稲作体験

を通じた苦労や楽しみ、家族で食事を作る様子、ごはんをおいしそうに食べる姿、美しい田んぼの風景に心惹かれた気持ちなど、温かな家族の愛情や、稲作を大事に継承する郷土への愛着など、日頃の体験や出来事を生き生きと的確にとらえていました。

次世代を担う皆さんの意識の高さに、あらためて目を見張るとともに、日本農業の将来やごはん食を中心とした日本型食生活の継承に、大きな期待を抱くことができました。

この作品集をご覧いただく皆さまにおかれましても、子どもたちが全力で取り組んだ作品を通じて、ごはん・お米の大切さや農業の価値について、あらためてお考えいただければ幸いです。

「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールは来年度も実施を予定しております。皆さんの素晴らしい作品にまた出会えることを期待しております。

最後に、今回ご応募いただいた学校の先生方をはじめ、関係する皆さま方のご支援とご協力に感謝申しあげ、ごあいさつとさせていただきます。



ぜんこくゆうしゅうしょう ぜんこく  
**全国優秀賞 (全国コンクール)**  
 いわてけんきょういく いんかいきょういくちょうしょう  
**岩手県教育委員会教育長賞**

「家族が見つめるわたしのいくらどん」

あい はら えい  
**相原 映**

もりおか しりつせんほくしょうがっこう ねん  
 盛岡市立仙北小学校 5年

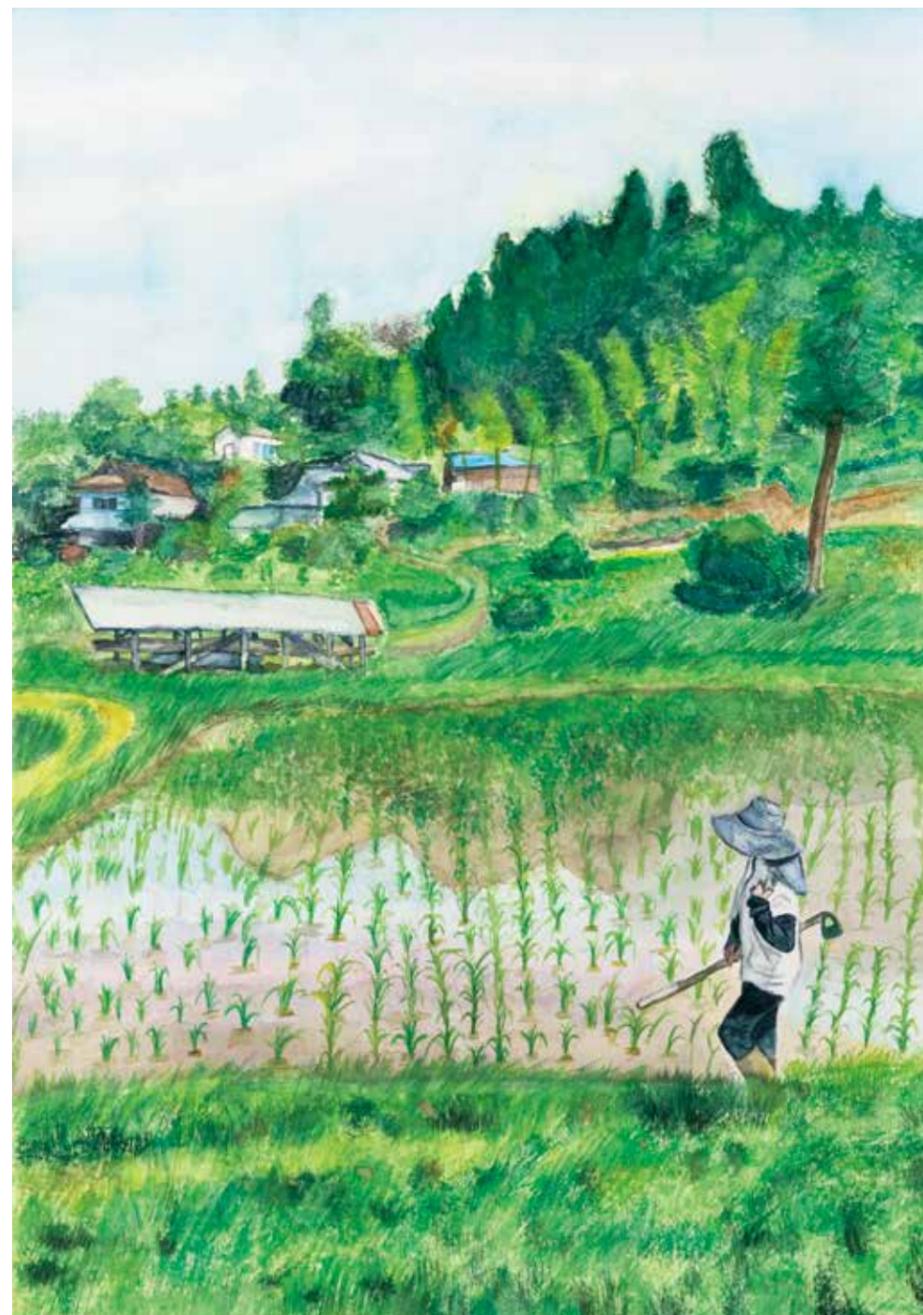


ぜんこくゆうしゅうしょう ぜんこく  
**全国優秀賞 (全国コンクール)**  
 いわてけんちじしょう  
**岩手県知事賞**

「水見半作～祖母の田んぼ～」

ち ば こ はる  
**千葉心遥**

いちのせき しりついちのせきひがしちゅうがっこう ねん  
 一関市立一関東中学校 2年

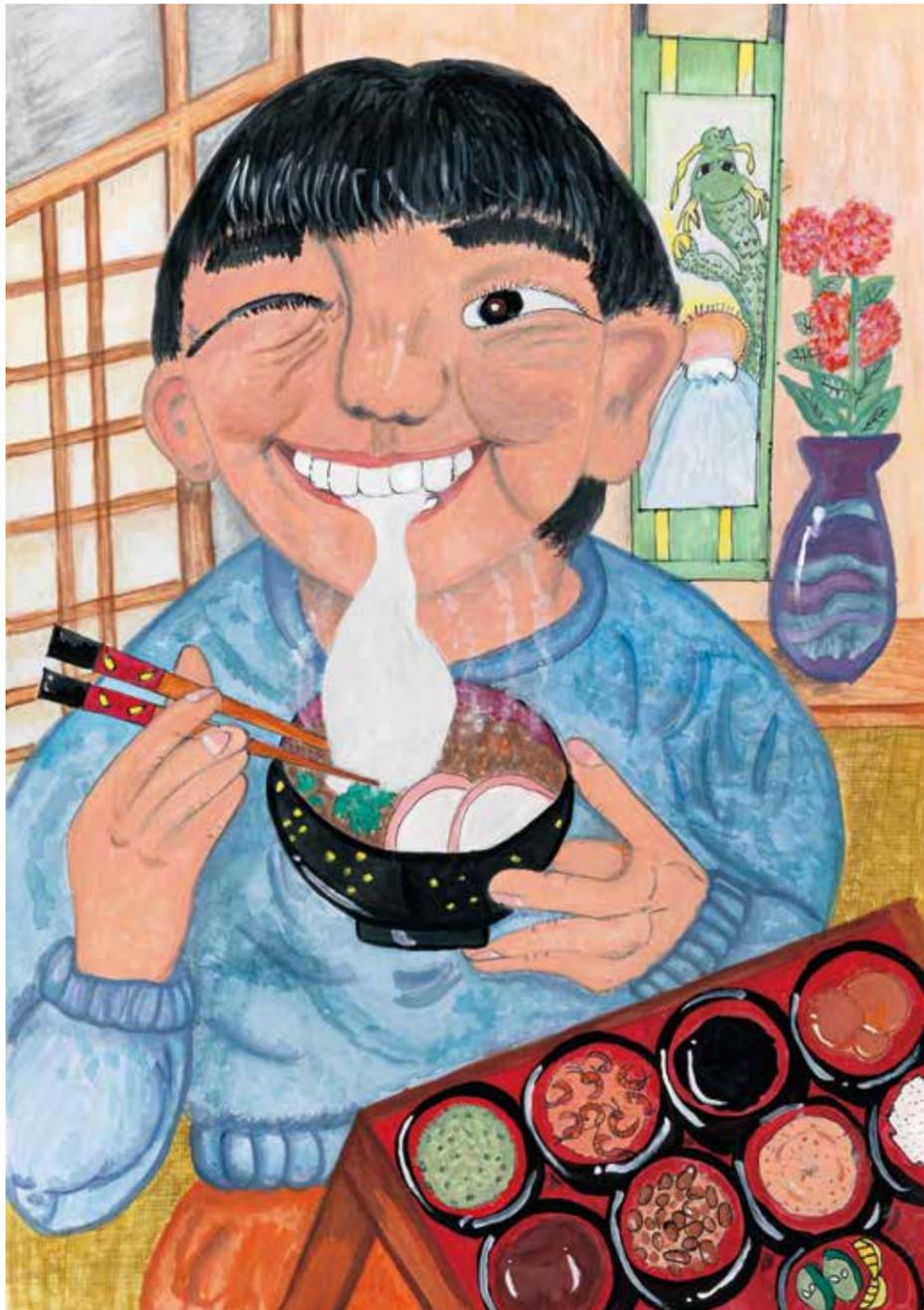


図画部門  
2部

いっばんしゃだんほうじんいえ ひかりきょうかい  
**一般社団法人家の光協会**  
ひがしにほんふきゅうぶんかきょくちょうしやう  
**東日本普及文化局長賞**

「名物・もちごぜん」

はやし たい が  
**林 大 雅**  
いちのせきしりついちのせきしょうがっこう ねん  
一関市立一関小学校 5年



図画部門  
1部

じえいはいわてけんごれんかいちやうしやう  
**JA岩手県五連会長賞**

「こめ・うまし!」

はやし くう が  
**林 空 我**  
いちのせきしりついちのせきしょうがっこう ねん  
一関市立一関小学校 2年



図画部門  
2部

ゆうしゅうしょう  
優秀賞

「ごはんのいいにおい」

たか はし ち あや  
高橋千恵

きたかみ しりつ えづり こしょうがっこう ねん  
北上市立江釣子小学校 3年



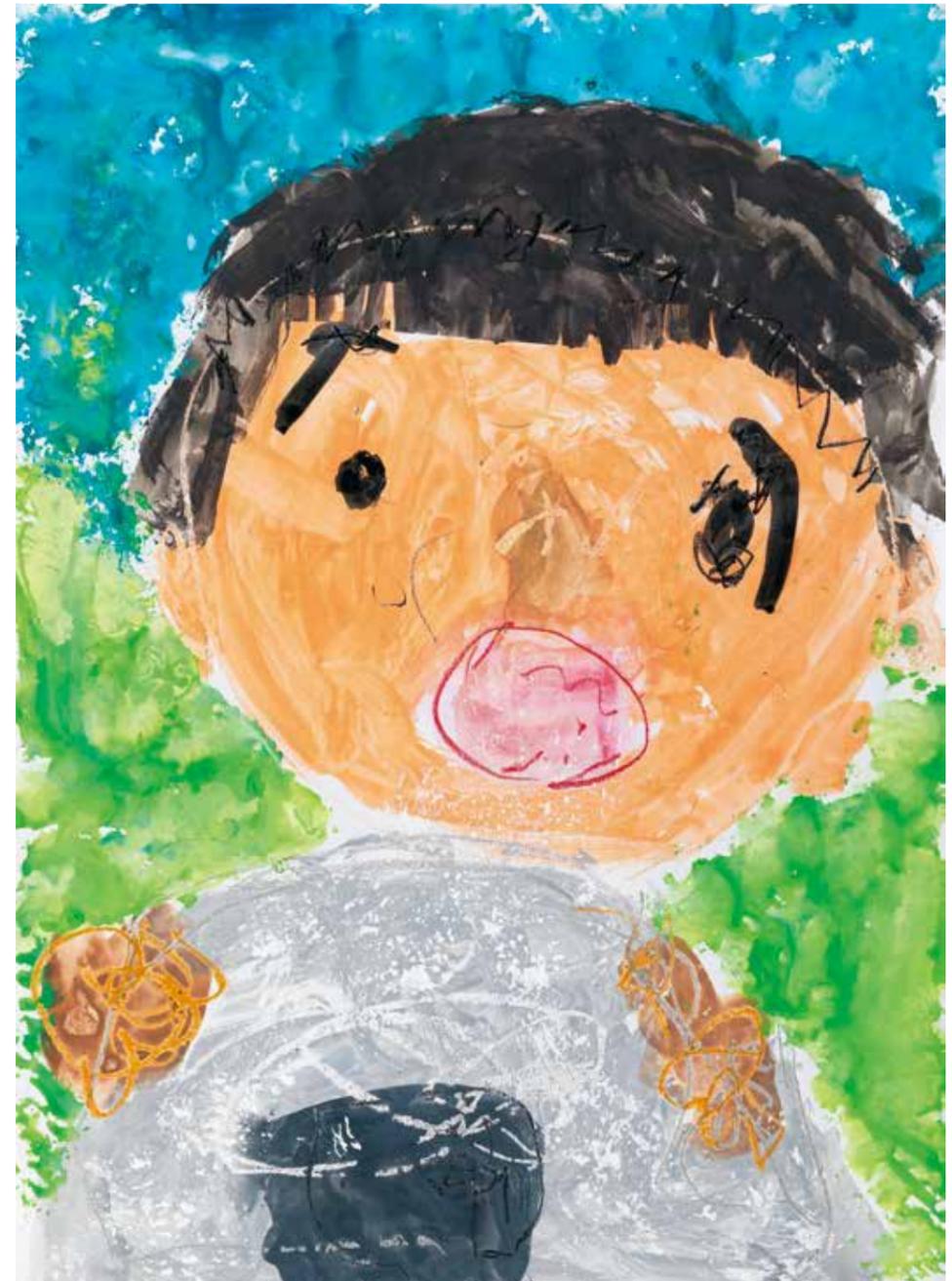
図画部門  
1部

かぶしがいしゃ にほんのうぎょうしんぶんとうほくし しょうしょう  
株式会社日本農業新聞東北支所長賞

「おにぎり あぐっ！」

き が けん おう  
嵯峨賢旺

いわて けんりつ くじたくようし えんがっこう しょうがくぶ ねん  
岩手県立久慈拓陽支援学校 小学部 1年





作文部門  
3部

ぜんこくゆうしゅうしょう  
**全国優秀賞 (全国コンクール)**  
いわてけんちじしゅう  
**岩手県知事賞**

「勝負飯記念日」  
やま だ ゆ い  
**山田 結心**

いわて だいがくきょういっくがくぶ ふ ぞくちゅうがっこう ねん  
岩手大学教育学部附属中学校 3年



去年の二月。弟が少年野球チームに入った。ずっとやりたい、やりたいと熱望して、念願叶ってチームに入った。四月になり、弟は四年生になった。野球はシーズンに入り、練習試合や公式戦で丸一日野球に行っていることが多くなった。それに伴って、昼食や補食を持っていく。最初は弁当箱に弁当を持っていった。ところが、毎週毎週、残してくるようになったのだ。聞けば二試合くらい予定が組まれていると、十五分くらいしか休憩時間がないという。パンや簡単に食べられるものを母が用意してみたのだが、米が一番お腹が一杯になるのだという。弟は同級生の中でも体が小さく、体重も軽い。そこに丸一日運動してくるのだから、夜しっかり食べてほしいのだが、疲れて帰ってきたり、夏になり暑くなると食が細くなった。そこで考えたのが、我が家の勝負飯。おにぎりの中に具材を色々詰め込んでしまうのだ。この方法は作ってる家庭はたくさんあると思う。我が家で必ず入るのは唐揚げと昆布。中身は各々の家で様々だと思う。小さめのおにぎりに食べられる具材を入れた勝負飯は、弟にも大好評だった。残してくることが少なくなったのだ。母が、この勝負飯を作り始めてから、私は自分の中学受験の時を思い出していた。受験の日、私の弁当は、この具材の中身がおにぎりの中に入った爆弾おにぎりだったのだ。ちよつと塩味のするご飯と、弁当箱に入る予定だった具材が入っているおにぎり、卵焼きとデザートの入った小さい弁当箱。何かあると我が家では、このおにぎりが勝負飯になった。弟の場合は、いつ集合がかかって大丈夫なように一口サイズで。まだ四年生で、控えの選手の弟はほとんど試合に出ることはなかった。七月頃からようやく、新人戦チームでの練習や、公式戦が始まったので、試合に出ることも増えた。「美味しかったよ!」真っ黒に日焼けした弟が帰ってくる。「今日は試合出たの?。」

「出たよ。」  
「三振か? エラーか?。」  
そんな話をしながら弁当袋を見ると、ミニミニの勝負飯おにぎりは一つも残っていない。  
ある日、卵焼きを中に入れてほしいと言ったことがあった。卵焼きはさすがに別で弁当箱だろう…。思っただけだが、口には出さなかった。  
朝早くから練習試合に行つた弟が今日も真っ黒になって帰ってきた。  
「今日ね、初めてヒット打てたんだよ!。」  
弟のヒット記念日  
勝負飯に新たなメニューが加わった日。  
おにぎり in 唐揚げ、卵焼き。弟はご飯と母の作る卵焼きが世界一だ、といつも言う。  
お米はどんな時も活力になる。そこに愛情というどこにも売っていない調味料が加わって、最大の勝負飯になる。  
最近では弟も自分でおにぎりを握ってみることが増えた。中に具材が入っていると握るのにコツがいる、ということも最近分かったらしい。  
私は今年受験生。三月には、どこかしらの高校を受験しているだろうと思う。きつとその時も、三年前と同じように勝負飯の爆弾おにぎりにちがいない。  
今から弟のように具材を考えてみようか。これは合わないだろう、と思っても、ご飯と好きな具材の組み合わせなら、私も、もしかしたら弟の「ヒット記念日」のように、一発逆転があるかもしれない。  
我が家の勝負飯、爆弾おにぎり。  
これからも、私たちの背中を押してくれる勝負飯であり続けるだろう。



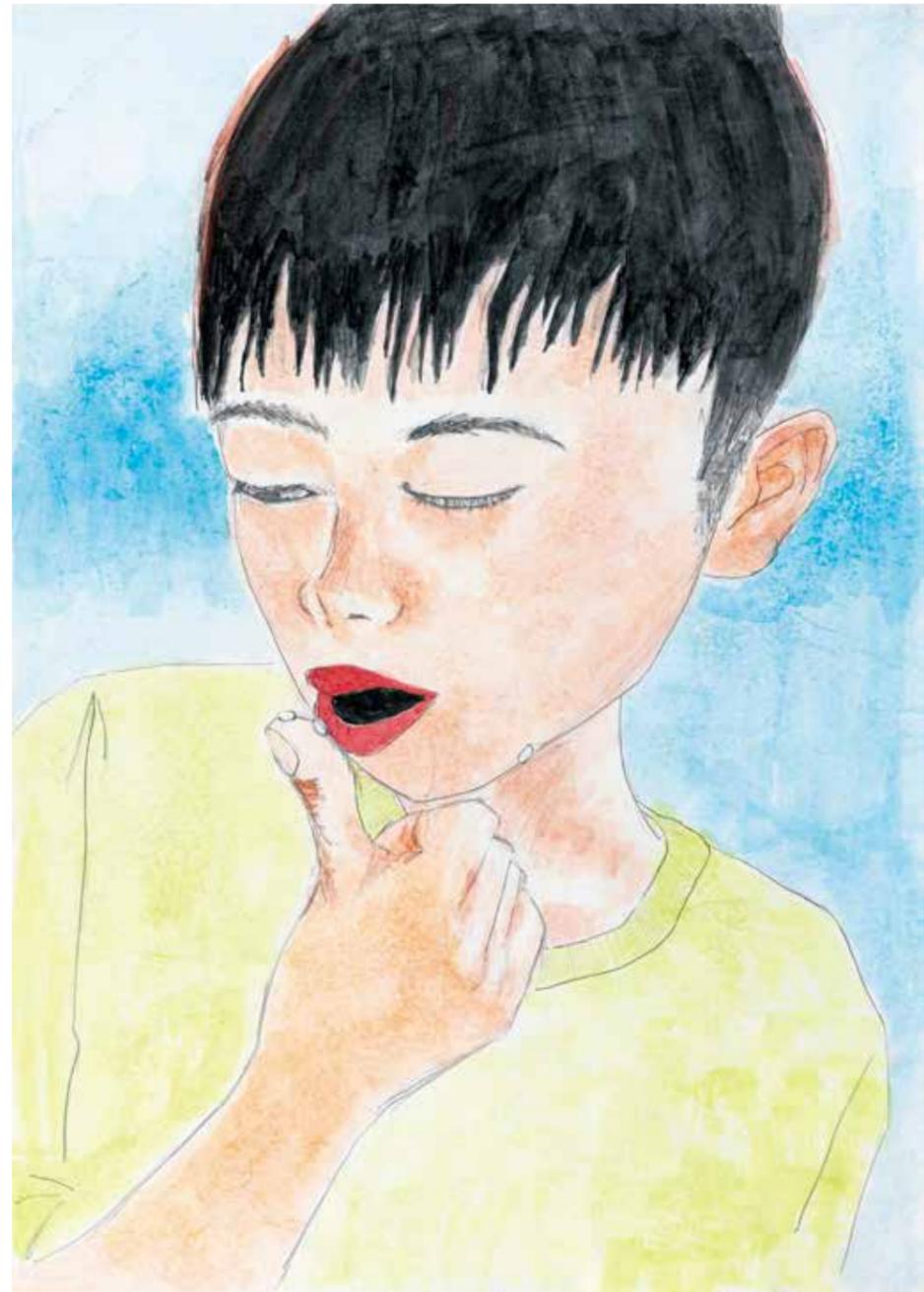
図画部門  
3部

ゆうしゅうしょう  
**優秀賞**

「かっこいい米の食べ方」

ふじ むら さ ん  
**藤村 日 珊**

きたかみ しりつきたかみきたちゅうがっこう ねん  
北上市立北上北中学校 2年



「おいしいごはんのひみつ」

あべいちか  
阿部 一愛

はなまきしりつみやのめしょうがっこう  
花巻市立宮野目小学校 6年



私の家では、お米を作っています。春には家族みんなで田植えをして、秋には稲刈りをします。私の仕事は、小さな弟や妹が仕事のじゃまをしないようにお世話をすることです。

小さい頃の私は、ご飯は味がしなくって思っていました。今は、かめばかむほど甘くなり、おいしくなっていくのが分かります。とくに、秋の新米を初めて食べる時は、私が一番はじめに、「おいしい。」

とさげんでしまいます。それほど、甘くておいしいご飯なのです。

親せきにもお米を分けていますが、親せきもみんな口をそろえて、「一愛ちゃんちの家のお米はおいしい。」

と言ってくれます。私は、親せきが喜んでいるのを見て、とてもうれしくなります。やっぱり私の家のお米はおいしいのです。

私の家のお米がおいしいのには、秘密があります。それ

は、家族の愛情がたっぷり入っていることです。お父さんやおばあちゃんが機械を使って作業をします。汗をかきながら仕事をしています。私は、五人の弟や妹達のお世話をしながら、仕事を見えています。もつと大きくなったら、お父さんやおばあちゃんの仕事をもつと手伝いたいと思います。こんなに家族全員の愛情がたっぷり入っているお米だから、おいしいお米に育つに決まっています。私は、これから、田植えや稲刈りのときには、自分にできる仕事を手伝っていきこうと思います。

それから、お米だけではなく、野菜やお肉についても考えてみました。私の家族が一生けん命にお米を作っているのと同じくらい、愛情を込めて、野菜や豚や魚を育てているのかと思いました。私は、あまり好ききらいをしないで何でも食べます。どんな野菜や肉やお魚もおいしいからです。これからは、お米と同じように、他の野菜や肉、魚なども、心を込めて育てたり、届けたりしてくれる人がいることを心にとめながら、いつでも作ってくれる人に感謝の気持ちをもって食べ物に無だにしない生活をしていきたいです。

「我が家の元氣と笑顔を守るために」

こつがいなごみ  
小 番 和 実

もりおかしりつきたまつぞのちゆうがっこう  
盛岡市立北松園中学校 3年



我が家では、平日は必ずごはんを朝食に食べている。学校や仕事に行くときに、パンよりごはんのほうが腹もちがいいから、力が出るという理由だ。でも私はそれ以外に、保育園に通っていた頃から中学校に通っている今もずつと、思うことがある。

私は保育園の年中頃から、家事の手伝いとして、米とぎを任された。料理をする祖母から、米とぎの際の順番、とぎの際の手の形の形、とぎ終わりの合図など、細かなことをたくさん教わり、まだ小さかった私にとっては、覚えるのが大変だった。当時は背が低く、台所の流しに手が届かなかったので、踏み台を使って、なんとかが手が届いた。いつもより目線がぐんと高くなって、大人は毎日こんな景色を見ているのかと思ひ、テンションが上がったのを感じている。我が家の米とぎのルールは、必ず冷水でとぎことだったので、初めての米とぎで、手を全部冷水につけたときは、体が凍るような感覚を味わった。しかし、祖母から初めて家事を任された使命感と、踏み台に乗って景色が変わったときの解放感で、私は毎日米とぎを頑張った。家族からは毎日、「和実がといだごはんは美味しいね」とほめられ、それがとても嬉しくて、誇らしくて、それから小学校に入學しても米とぎを続けた。私は小学校六年生になった。このときの私は、家族にやたら反抗したり、何事にも全て手を抜いて、だるそうに取り組むのが格好良いと思つていた時期で、その考え方は米とぎにも影響していた。あんなに楽しくて誇りしかった米とぎが面倒くさくなつた。ゲームの時間を割きたくなかつたし、何より手が冷たい。そして私は米とぎを以前のように丁寧になくなつた。濁つた水を捨てる際に、お米は一粒もこぼさないようにという教えを破り、何度も何粒もこぼしても、気にしなかつた。水がすっかり透明になるまで水を換えるという教えも破り、

多少水が濁つても知らないふりをした。そしてついに祖母に「もつと丁寧にときなさい」と叱られてしまった。しかし反抗的だった私はその言葉がとてつと頭にきた。「寒い冬でも冷水に手をつつこんで米をといでやっているのに」と不満が爆発して、「うるさい。水が濁つていたほうが栄養があるんだ」と強く言い放ち、その後も雑に米をとき続けた。そうして家族から「ごはんが美味しい」とほめられることも少なくなり、毎朝「そんなにまずくない」と自分に言い聞かせて食べるごはんを、私も美味しいと感じられなくなつた。悲しかった。毎朝美味しそうにごはんを食べる家族の笑顔も、私が奪っているんだと思うと、とても悲しいし、後悔した。私は耐えられず、初心を思い出して丁寧な米をといだ。お米を絶対にこぼさないように細心の注意を払い、水も透明に透き通るまで何度も換えた。すると、また家族に「和実がといだ米が一番美味しい」とほめられた。再び聞くことができたその言葉と、家族の笑顔が本当に嬉しくて、その日の朝ごはんは一段と美味しく感じた。祖母の言葉の大切さも分かり、今後丁寧な米をといこうと、心から思った。

家族にほめられたことと、家族の笑顔をとり返せたことで自信がつき、私は今でも誇りを持って米をといでいる。ごはんを食べると力が出るのは、単に腹もちがいいからという理由だけでなく、家族の笑顔もエネルギーになっているからだと思ふ。要するに、我が家にとつてのごはんは、元氣と笑顔をつくりだす、大切なものなのだ。そんな大切なものを、私は任されている。だから、これからも丁寧な米をといで、家族の元氣と笑顔を守っていきこうと、私は思ひ続けている。やはりごはんは、我が家にとつて必要不可欠な存在なのだ。

### 「動くレストランで朝ごはん」

さいとう たいち  
齋藤 太一

ふだいそんりつ ふだいしやうがっこう ねん  
普代村立普代小学校 5年



「動くレストラン」は、特別な日に開店します。それは、姉の部活動の試合の応援をするために、会場へ行く時です。いつも早起きをして遠くまで行きます。ぼくはちよつとした旅行気分。起きてすぐ家を出るので、朝ご飯を食べる時間がありません。そういう日は、お楽しみの車で食べる朝ご飯です。

車の中の朝ご飯は、大体おにぎりを食べます。こぼす確率が低く、食べやすいからです。ふつうのおにぎりでも、車の中で食べると味は別格なのです。たまに、デザートも付きます。運転手のお父さんは食べることができなくてかわいそうだけれど気分はまるで「動くレストラン」です。

姉の応援をするときは、会場でよく歌を歌います。車の中でその歌を大声で練習します。さっきまでのレストランが、カラオケ屋さんに変身です。

特別なご飯を食べて、カラオケをしたら、大満足。ぼくとお母さんは爆睡してしまいます。そして気付いたら会場に着いています。だから、ぼくとお母さんは元気いっ

頭の中が曇っていく。模試の結果が出て点数を見たときには、その雲が心に雨を降らすのだろうか。問題が解けない自分に絶望した。

前半が終わり、昼食の時間になった。その日は、おばあちゃんが僕のために初めて弁当を作ってくれた。朝早くから支度をしてくれて、トントントンというリズムミカルな包丁の音と優しい味噌汁の匂いで僕は目を覚ました。

弁当は栄養バランスが完璧で、量もたくさんあった。僕のおばあちゃんといったらお手製のチーズ入りの卵焼き。家では小さい頃から「ぼつぼあちゃんの卵焼き」と呼んでいる。卵焼きとチーズの最高の組み合わせで、食べると幸せな気持ちになる。魚やポテトサラダ、焼き肉など、全て手作りの弁当に感動した。

おばあちゃんの作った弁当を食べていて、ふと感じた愛情。僕を応援してくれているような、そよ風のような優しさが、この八百立方センチメートルの弁当箱から伝わってきた。言葉では言い表せない思いが、弁当箱にぎしりと詰まっていた。どんな物よりも価値のある一点物を、僕は口一杯にはおぼった。模試が終わり、おばあちゃんに空っぽになった弁当箱を見せ、「作ってくれてありがとう。」と恥ずかしさもあつたが頑張つて伝えた。おばあちゃんはこつちに向かつて微笑んだ。

様々な具材が組み合わさつて一つの弁当となるように、自分の足りない部分を補つていこう。自分の進むべき道が開けた気がした。

受験の日には、またおばあちゃんに弁当を作ってもらいたい。そして合格発表の日には、またあの真つ白でほっかほかなご飯を食べたい。

ぼいで応援するけれど、ずっと運転していたお父さんはへトへトです。やっぱり朝ご飯は元気の源なのだとぼくは思います。

がんばつて応援をしたら、あつという間にお昼ご飯です。お母さんのおにぎりの登場です。試合と試合の間に急いで食べる姉のおにぎりは一口サイズ。ゆつくりいっぱい食べるぼく達のおにぎりは特大サイズです。朝みたいにデザートはないけれど、これも特別なご飯です。

でも、ついに姉が中学三年生になりました。部活動が終わつてしまつたのです。「動くレストラン」は閉店です。

ぼくは、中学校の部活動をまだ決めていないけれどもし部活動に入ったら、ぼくの応援のために「動くレストラン」を開店してほしいです。その時はきっと、ぼくは応えんされる側なので、「動くレストラン」には入れません。けれど、今度はぼくのために、一口サイズのおにぎりを作つてほしいです。お母さん、ぼく、おにぎりを食べてがんばるからね。

### 「八百立方センチメートルの愛情」

あいざわ かずき  
相澤 一輝

みやこしりつ つがるいしちやうがっこう ねん  
宮古市立津軽石中学校 3年



「もう何も分らないや。」  
僕にとつての初めての模試は、そこから始まつた。慣れない場所、慣れない答案用紙。ピリピリとした緊張感のある教室で、コッコツと鉛筆の音だけが響く。やっていることはいつもの学校のテストと何も変わらないのに、なぜか頭の中は真つ白になった。僕は今、一つの夢がある。その夢を現実にするための高校に進学することだ。その先の大学に向けて僕は勉強を続けている。僕の志望校は宮城県にある為、宮城県の模試を受けることにした。試験会場がおばあちゃんの家の近くだったので、前日に泊まらせてもらうことにした。初めての模試で不安なこと、自分の将来のこと、おばあちゃんに優しくアドバイスをくれた。「自分の人生だから、しつかり頑張るんだよ。」そう言つて、力のつく真つ白でほっかほかのご飯を作つてくれた。

実は僕には、同じクラスに目標としている人がいる。どれだけテストを頑張つても、どんなに見直しをしても、その人には勝てない。努力が足りない、追いついていないと、悔し泣きしたこともあつた。どうにもならない自分へのいら立ち、葛藤、情けなさ。もう受験なんて無くなつてしまえばいいのにとも思つた。でも、自分には夢がある。やるべき事は何だろう。自問自答を繰り返した。立ち止まつてはいけない。進むしかない。今の自分には、可能性は無限大にある。

そう自分を鼓舞して挑んだ今回の模試。ついにその日がやってきた。見る人みんなが頭が良さそうに見え、全員が参考書と睨み合つている。その近寄り難い雰囲気は圧倒された。三月にはここにいる人達全員と戦うのだろうか。そう考えると、心臓の動きが早くなるのを感じた。

「では問題を解いてください。」  
テストが始まつた。世の中の受験生が苦手とする部分を煮詰めたような問題が出てきた。分からない問題を見直すたびに、

頭の中が曇っていく。模試の結果が出て点数を見たときには、その雲が心に雨を降らすのだろうか。問題が解けない自分に絶望した。

前半が終わり、昼食の時間になった。その日は、おばあちゃんが僕のために初めて弁当を作ってくれた。朝早くから支度をしてくれて、トントントンというリズムミカルな包丁の音と優しい味噌汁の匂いで僕は目を覚ました。

弁当は栄養バランスが完璧で、量もたくさんあった。僕のおばあちゃんといったらお手製のチーズ入りの卵焼き。家では小さい頃から「ぼつぼあちゃんの卵焼き」と呼んでいる。卵焼きとチーズの最高の組み合わせで、食べると幸せな気持ちになる。魚やポテトサラダ、焼き肉など、全て手作りの弁当に感動した。

おばあちゃんの作った弁当を食べていて、ふと感じた愛情。僕を応援してくれているような、そよ風のような優しさが、この八百立方センチメートルの弁当箱から伝わってきた。言葉では言い表せない思いが、弁当箱にぎしりと詰まっていた。どんな物よりも価値のある一点物を、僕は口一杯にはおぼった。模試が終わり、おばあちゃんに空っぽになった弁当箱を見せ、「作ってくれてありがとう。」と恥ずかしさもあつたが頑張つて伝えた。おばあちゃんはこつちに向かつて微笑んだ。

様々な具材が組み合わさつて一つの弁当となるように、自分の足りない部分を補つていこう。自分の進むべき道が開けた気がした。

受験の日には、またおばあちゃんに弁当を作ってもらいたい。そして合格発表の日には、またあの真つ白でほっかほかなご飯を食べたい。

ぼいで応援するけれど、ずっと運転していたお父さんはへトへトです。やっぱり朝ご飯は元気の源なのだとぼくは思います。

がんばつて応援をしたら、あつという間にお昼ご飯です。お母さんのおにぎりの登場です。試合と試合の間に急いで食べる姉のおにぎりは一口サイズ。ゆつくりいっぱい食べるぼく達のおにぎりは特大サイズです。朝みたいにデザートはないけれど、これも特別なご飯です。

でも、ついに姉が中学三年生になりました。部活動が終わつてしまつたのです。「動くレストラン」は閉店です。

ぼくは、中学校の部活動をまだ決めていないけれどもし部活動に入ったら、ぼくの応援のために「動くレストラン」を開店してほしいです。その時はきっと、ぼくは応えんされる側なので、「動くレストラン」には入れません。けれど、今度はぼくのために、一口サイズのおにぎりを作つてほしいです。お母さん、ぼく、おにぎりを食べてがんばるからね。



総評

審査委員長



元岩手大学教職大学院 特命教授 小岩和彦

第49回「ごはん・お米とわたし」作文・図画岩手県コンクールが、主催者および関係各位の皆様方のご尽力により今年も無事開催されたことに感謝申し上げます。ありがとうございます。

今回のコンクールには、作文の部に60点、図画の部には125点、合計185点というたくさんの応募がありました。作品の応募に当たって、様々ご指導いただいた各学校の先生方に心から感謝申し上げます。そして、県代表として出品した全国コンクールでは、昨年度と同様に、今年も作文の部で1点、図画の部で2点の優秀賞を受賞することができました。このことは、岩手の子どもの作品のレベルの高さを示すものでありとても素晴らしいことだと思っております。

審査をさせていただき、応募してくれた皆さんが様々な思いを持ち、それを大事にしながら一生懸命作品を作り上げたのだということが伝わってきて、とてもうれしく思いました。

本コンクールには、作文の部・図画の部の2つの部門がありますが、どちらの部門にも共通していたことがあったように思います。それは、他の人のまねや、どこからか借りてきた表現ではなく、自分の日常生活に目を向け、自分の体験を大事にし自分なりの言葉や感性で表現している作品が多く見受けられたということです。日本人の主食とも言うべきお米・ごはんという視点は同じですが、切り取ってくる場面や感じたことなどはそれぞれ違っていて、素晴らしい作品が多

かったと思います。

作文の部では、おにぎり（ごはん）を通した家族の触れ合いや大切な人への思い、感謝の気持ちなどが自分の言葉で素直に表現されてきましたし、文章構成なども工夫されているなあと感じました。図画の部では、おいしいお米を作るために、一生懸命努力している家族への思いが伝わってくる作品や、好きなごはんを食べている様子をとても豊かな表情で描いている作品など、見た人がほのぼのとするような作品が多かったと思います。

今、世の中では人工知能と呼ばれる優れた機器が登場し、様々な場面で活用されるようになってきました。必要な条件を入力すれば、それに合った文章や画像を作ってくれるという便利なものです。技術がどんどん進歩していく現在の社会の変化を考えれば必要なことだと思います。ただ、皆さんにお願いしたいのは、今回の作品にたくさん見られたように、これからも自分の身の回りの出来事に対して敏感に感じ取る心を持ち続けながら、さらに自分なりの素晴らしい作品を作り上げていってほしいと思います。そのことが、見る人読む人に感動を与える作品に繋がっていくのだらうと思います。そして、来年もたくさん作品が寄せられることを期待しています。

最後に、今回審査員として児童生徒の皆さんの素晴らしい作品に触れる機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます、総評といたします。

図画部門を審査して



元中学校指導教諭 佐々木 俊江

きました。どの作品も、実体験や学習したことを基に、「ごはん・お米」と、自分の生活やご家族との関わり、これからの稲作について、真正面から向き合い、作文にまとめられていることに嬉しさを感じます。

岩手県知事賞を受賞した山田結心さん（岩手大学教育学部附属中学校3年）の「勝負飯記念日」は、少年野球チームに所属する弟を後押しする食事を「勝負飯」と表現し、その時々エピソードに合わせた勝負飯が登場するアイデア満載の作品です。勝負飯が登場することに場面展開されるテンポのよさや、受験を控える決意・勝負飯をつくりたいという意思につなげている未来志向の終わり方が、この作品を一層輝かせています。

岩手県教育長賞を受賞した小番和実さん（盛岡市立北松園中学校3年）の「我が家の元気と笑顔を守るために」は、お手伝いのお米ときを通して、自分が迷ったり、悩んだりしながらも決意を新たにする姿、そしてそれを見守るご家族の様子が書かれた作品です。自分が迷っているときの研ぎ汁を「白く濁った」と表現し、決意したときの研ぎ汁を「透明に透き通る」と表現し、研ぎ汁の色と自分の気持ちを重ね合わせる心情表現が秀逸です。

JA岩手県五連会長賞を受賞した阿部一愛さん（花巻市立宮野目小学校6年）の「おいしいごはんのひみつ」は、ご家族がつくるお米を親戚の方が食べたときの反応をとり上げ、誇らしく思っている心情を素直に表現している作品です。特に、新米を食べているときの描写は、読んでいて食欲をそそられるほど、表現が巧みでした。

家の光協会東日本普及文化局長賞を受賞した相澤一輝さん（宮古市立津軽石中学校3年）「八百立方センチメートルの愛情」は、読み進めることで、題名の体積が弁当箱の大きさとわかり、弁当箱に詰められた祖母の愛情をじわじわと感じられる作品になっています。

たくさんの図画作品が応募され、審査をしながら子どもたちの豊かな感性やいきいきとした表現力を感じることができ、幸せな気持ちになりました。さらに今回は、全国審査において小学校、中学校それぞれから優秀賞が選ばれるなど、優れた作品との出会いもあり感動いたしました。また、毎年のように出品している人も多く、よりよい作品が生み出されることにつながっているように思います。

全国審査優秀賞並びに岩手県知事賞を受賞した千葉心遙さん（一関市立一関東中学校2年）の作品「水見半作く祖母の田んぼ」は、お米を育てるうえで最も大切な水の管理を作品のテーマとしたところが素晴らしいです。おばあさんが田んぼをととても大切にしている様子を美しい田園の風景とともに柔らかなタッチで表現している魅力溢れる作品です。草木の緑色と対比して、田んぼの水の色に黄味を使うなど、細かな工夫もみられる素晴らしい作品です。

全国審査優秀賞並びに岩手県教育委員会教育長賞を受賞した相原映さん（盛岡市立仙北小学校5年）の作品「家族が見つめるわたしのいくらどん」は、人物やメインのいくら丼まですべて切り絵で丁寧に表現しています。表現のアイデアも熱心に取り組んだ様子も大変素晴らしいです。いくら丼の赤い色が、作品全体を明るくしています。

JA岩手県五連会長賞を受賞した林空我さん（一関市立一関小学校2年）の作品「こめ・うまし」は、場面設定が秀逸で、人物の表情が見事に描かれています。親子の愛情や温かな家庭の様子がごはんを通して感じられる素晴らしい作品です。

家の光協会東日本普及文化局長賞を受賞した林大雅さん（一関市立一関小学校5年）の作品「名物・もちごぜん」は、地域に伝わる食文化をテーマにし、そのよさを丁寧に描いた素晴らしい作品です。もちを取り上げたアイデアも新しいですし、カラフルなもち料理

模試の緊張感と昼休みに一息つく時間の対比が、祖母の愛情を一層引き立てています。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した齋藤太一さん（普代村立普代小学校5年）の「動くレストランで朝ごはん」は、ご家族で姉の部活動の試合に応援に行く車内を「動くレストラン」と表現し、読者の興味を引く作品になっています。自分の中学入学後の部活動を想い起して、「動くレストラン」の再オープンを期待する叙述から、前向きさが伝わってきます。

優秀賞を受賞した玉澤璃知佳さん（一関市立藤沢小学校5年）の「お米の未来」は、社会科の学習で調べたことと、実際にお米をつくっている祖父のセリフを織り交ぜながら、稲作の未来について、根拠を示し、論を展開している、説得力のある作品です。

同じく優秀賞を受賞した佐々木晴輝さん（一関市立弥栄小学校1年）の「かぞくそろっておいしいごはん」は、ご家族の食卓を場面とし、お米の収穫について、情景をありありと表現しています。祖父がつくるお米に焦点を当て、祖父との仲睦まじい関係を表しています。

学校奨励賞は、北上市立江釣子小学校です。応募作品数が最も多く、全作品が表現に優れていました。学校をあげて本コンクールに取り組んだ実績が高く評価されている受賞です。

入賞作品は勿論のこと、多くの応募作品から、お米への感謝の気持ち、家族への愛情、そして、稲作を大事に継承する郷土への愛着が伝わってきました。今後、子どもたちが主体的に「ごはん・お米」に関する様々な体験を行い、これからの食・農の担い手として、「ごはん・お米」について考え続けることを期待して、選評といたします。

作文部門を審査して



盛岡市教育委員会 学校教育課 主任指導主事 柴田 良輔

今年度も多くの児童生徒の皆さんから応募をいた

全国コンクール

優秀賞

- 千葉 心 遙 一関市立一関東中学校 2年 「水見半作く祖母の田んぼく」
- 相原 映 盛岡市立仙北小学校 5年 「家族が見つめるわたしのいくらどん」

岩手県コンクール

岩手県知事賞

- 千葉 心 遙 一関市立一関東中学校 2年 「水見半作く祖母の田んぼく」

岩手県教育委員会教育長賞

- 相原 映 盛岡市立仙北小学校 5年 「家族が見つめるわたしのいくらどん」

JA岩手県五連会長賞

- 林 空 我 一関市立一関小学校 2年 「こめ・うまし！」

一般社団法人家の光協会東日本普及文化局長賞

- 林 大雅 一関市立一関小学校 5年 「名物・もちごぜん」

株式会社日本農業新聞東北支所長賞

- 嵯峨 賢 旺 岩手県立久慈拓陽支援学校 小学部 1年 「おにぎり あぐっ！」

優秀賞

- 高橋 千 恵 北上市立江釣子小学校 3年 「ごはんのいいにおい」
- 藤村 日 珊 北上市立北上北中学校 2年 「かっこいい米の食べ方」

学校奨励賞

二戸市立福岡小学校

佳作

1部

- 高橋 綾乃 湯田小 1年 「いっぱいごはんを たべるぞ！」
- 西野 涼空 宮野目小 6年 「おいしいおにぎり 「いただきますーす。」

岡田 凜奈 福岡小 2年 「おこめをおいしく いただきます」

伊藤 葵 巖美小 6年 「家族と一緒に…」

関 杏太 福岡小 2年 「バーベキューでたべる おにぎりはさいこう！」

佐々木祐希 見前中 1年 「ご飯をたくさんたべよう」

筒井 千貴 福岡小 2年 「ごはんはおいしいな！」

千田 聖 北上北中 2年 「bigオニギリ」

三浦 進平 山目小 2年 「ぼくのおしごと米とき」

藤田 莉菜 北上北中 2年 「弟の朝食」

高橋 惟人 湯田小 3年 「大きくそだったいなほ」

小野寺一夏 萩荘中 2年 「お米と私」

2部

野崎 晃琉 福岡小 4年 「お米の調子」

芳賀 夢唯 萩荘中 2年 「おいしいお米」

大橋 響希 宮野目小 5年 「ごはん・お米とわたし」

奥山 穂花 北上北中 3年 「お米の隠し味は海」

志田 葵依 猪川小 5年 「おいしいお米ありがとう」

八重樫航太 北上北中 3年 「おいしいお米」

橋本 悠希 滝沢小 5年 「美味しいおにぎり 「いただきますー！」

「いただきますー！」

# 作文部門入賞

## 全国コンクール

### 優秀賞

山田 結心 岩手大学教育学部附属中学校 3年 「勝負飯記念日」

## 岩手県コンクール

### 岩手県知事賞

山田 結心 岩手大学教育学部附属中学校 3年 「勝負飯記念日」

### 岩手県教育委員会教育長賞

小番 和実 盛岡市立北松園中学校 3年 「我が家の元氣と笑顔を守るために」

### JA岩手県五連会長賞

阿部 一愛 花巻市立宮野目小学校 6年 「おいしいごはんのひみつ」

### 一般社団法人家の光協会東日本普及文化局長賞

相澤 一輝 宮古市立津軽石中学校 3年 「八百立方センチメートルの愛情」

### 株式会社日本農業新聞東北支所長賞

齋藤 太一 普代村立普代小学校 5年 「動くレストランで朝ごはん」

### 優秀賞

佐々木 晴輝 一関市立弥栄小学校 1年 「かぞくそろっておいしいごはん」

玉澤 璃知佳 一関市立藤沢小学校 5年 「お米の未来」

### 学校奨励賞

北上市立江釣子小学校

## 佳作

### 1部

菊池 笑平 江釣子小 3年 「大切なお米」

高橋 史祈 江釣子小 3年 「おばあちゃんとお米とき」

高橋 千恵 江釣子小 3年 「おいしいお米のたきかた」

高橋 仁逢 江釣子小 3年 「ごはんは、わたしのエネルギー」

高橋 侑 江釣子小 3年 「感しゃして食べたい」

千葉 悠月 江釣子小 3年 「ぼくとお米」

照井 菜月 江釣子小 3年 「大きなお米」

堀江 湊介 江釣子小 3年 「ありがとうお米」

### 2部

小田嶋祥花 江釣子小 4年 「栄養たくさんの玄米」

高橋 謙斗 江釣子小 4年 「ぼくのすきな米」

高橋 由芽 江釣子小 4年 「だれが作ったの？」

伊藤木の実 湯田小 4年 「おいしいお米はみんなを笑顔に」

平野 礼煌 矢沢小 6年 「おいしいお米作り」

平沢 慶佳 一関小 6年 「未来のための米作り」

### 3部

阿部 凜 花泉中 1年 「じいちゃんの米」

藤枝 麻桜 和賀東中 2年 「田んぼに広がる人の思い」

飯島 彩芽 磐井中 2年 「身近な幸せ」

熊谷 音々 桜町中 2年 「ごはん・お米とわたし」

金 英佑 北松園中 3年 「最後の一粒まで 食べる意味」

中村 心架 岩手大学教育学部附属中学校 3年 「あたたかい 我が家のごはん」

## 第49回「ごはん・お米とわたし」

# 作文・図画岩手県コンクールの概要

### 応募点数

学校	作文	図画	合計
小学校	28	109	137
中学校	32	16	48
計	60	125	185

### 応募締切日

令和6年9月2日(月)

### 第1次審査会

令和6年10月17日(木)

### 第2次審査会

令和6年12月9日(月)

### 主 催

岩手県内各JA・JA岩手県中央会

### 後 援

岩手県・岩手県教育委員会

いわてのお米ブランド化生産販売戦略推進協議会

一般社団法人家の光協会東日本普及文化局・株式会社日本農業新聞東北支所

JA岩手県信連・JA岩手県厚生連・JA全農いわて・JA共済連岩手

### 審査員(敬称略)

審査委員長	小 岩 和 彦	元岩手大学教職大学院 特命教授
専門審査委員	佐々木 俊 江	元中学校指導教諭
専門審査委員	柴 田 良 輔	盛岡市教育委員会学校教育課 主任指導主事
審査委員	菅 原 伴 和	岩手県農林水産部流通課 流通企画・県産米課長
審査委員	村 上 吉 孝	(一社)家の光協会東日本普及文化局 文化委員
審査委員	吉 田 浩 史	(株)日本農業新聞東日本統括支所 副支所長
審査委員	工 藤 孝 志	JA岩手県信連 代表理事専務
審査委員	菅 生 理	JA岩手県厚生連 常務理事
審査委員	畠 山 正	JA全農いわて 副本部長
審査委員	坂 本 昇	JA共済連岩手 県副本部長兼管理部長
審査委員	照 井 仁	JA岩手県中央会 常務理事

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

JA岩手県中央会 JA支援部[組織広報班] 〒020-0022 盛岡市大通一丁目2番1号 TEL019-626-8519

ホームページ <https://jaiwate.or.jp/> Eメールアドレス [kouhou@jaiwate.or.jp](mailto:kouhou@jaiwate.or.jp)

[ 発行 ]

令和7年2月4日

[ 企画・編集・発行 ]

JA岩手県中央会

[ 印刷・製本 ]

川嶋印刷株式会社



「国消国産」とは、国民が必要とし消費する食料は、できるだけその国で生産するという考え方。JAグループ独自のキーメッセージです。